

人的支援事業による定住者の生活実態に関する研究
 —滋賀県高島市朽木地区における緑のふるさと協力隊を事例に—
 A Study of the Livelihood of Migrants by Human Support: A Case of
 Midori-no-Furusato-Kyoryokutai in Kutsuki District, Shiga Prefecture

○ 栗原良樹*

中島正裕**

○ Yoshiki KUWABARA*

Masahiro NAKAJIMA**

1. はじめに

近年、外部主体を地域活動の担い手として農山村へ派遣する人的支援事業への期待が高まっている。全国規模では「緑のふるさと協力隊」(以下、「緑」)、「地域おこし協力隊」, 「田舎で働き隊」が実施されている。これらの事業評価は、事業期間中の評価はなされているが、事業実施後の評価は定住者数^{注1)}など統計的なものに留まっており、実際の定住者の生活実態は未解明となっている。

本研究では、人的支援事業の先駆けである「緑」を長期間実施している滋賀県高島市朽木地区(以下、朽木地区)を対象地とし、「緑」の活動実態の解明(目的1)、定住者の生活実態の解明(目的2)を行う。

2. 研究方法

2.1 緑のふるさと協力隊の概要

協力隊は地球緑化センターにより1994年から実施されている。農山村に興味をもつ都会の若者を協力隊員として過疎・高齢化が進行した地方自治体に1年間派遣する事業である。地球緑化センターは隊員・受入自治体の両者へのフォローアップを行う。受入自治体は隊員の生活費や居住費、光熱費などを負担し、隊員の活動先の調整などを行う。2011年度までに、受入自治体102市町村、参加者数574名、定住率約3割である¹⁾。

2.2 滋賀県高島市朽木地区の概要

朽木地区は滋賀県最西端に位置する旧朽木村域である。朽木地区は人口2,072人、高齢化率35.9%と過疎高齢化が進行している(2010年)。2000年から2012年までに12回、年1名ずつ隊員を受入れており、現在5名の協力隊参加者が定住している。

2.3 調査・分析の方法

目的1については資料調査および朽木支所の担当者を対象に行った聞き取り調査により、「緑」の活動内容の解明を行った。目的2については、「緑」参加後に定住している全員を対象に、聞き取り調査と行い、「緑」期間中か

ら現在までの生活実態の解明を行った。

3. 緑のふるさと協力隊事業の活動内容

朽木地区における「緑」の活動は、朽木支所を拠点に、各種団体に派遣され、活動を行う。活動内容はそれぞれの団体で異なるが、農林作業やイベント企画・手伝いなどが多い。

主な活動内容をみると、2000~2002年度は森林組合での林業作業が、2003~2005年度は観光協会や宿泊温泉施設などでの活動が中心であった。しかし、森林組合の仕事の減少、2005年の市町村合併による観光協会主催のイベントの減少に伴い、2006年度以降は、くつきの森など活動先の組織が多様化していった。また、2009年度以降は、集落支援活動も行うようになった。

4. 定住者の生活実態

定住者の生活実態を整理した結果を表1に示す。以下、3つの観点から分析を行う。

4.1 定住の経緯

「緑」への参加理由に自然の中での活動への憧れをあげていたA・C氏は、活動の多くを森林組合で行っていた。事業期間終了後、A氏はそのまま朽木地区へ定住し、森林整備の仕事に就いたのち森林組合の作業員の職に就いた。一方C氏は希望する森林関係の仕事が見つからなかったため、約4年間を他地域で生活したのち、朽木地区の森林組合での募集に採用されたのを契機に朽木地区へ定住することになった。

「緑」への参加理由に田舎暮らしへの憧れをあげていたD・F・H氏のうち、D・F氏は活動の多くを観光協会、H氏は多様な団体で活動していた。朽木地区の住民に惹かれたというD・F氏は事業期間終了後に朽木地区で定住し、パートや臨時職員など非正規雇用の職を転々としていた。H氏も同様に定住したが、東京の仕事仲間から映像編集の仕事などを貰っていた。

4.2 定住者の生活実態

事業期間中、隊員は月5万円の支給で自炊

*東京農工大学大学院農学府 *Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

**東京農工大学大学院農学研究科 **Institute of Agriculture, Tokyo University Of Agriculture and Technology

キーワード：滋賀県高島市朽木地区、緑のふるさと協力隊、生活実態、定住者

生活している。この状況を知っている地域住民からおすそ分けを頂く、食事に誘われるなどしていた。また役場や活動先の人たちと飲むなどの交流も多く行われていた。こうした付き合いを通じて地域住民との交友関係は形成されており、その関係は定住後には様々な形態で拡大・成熟されている。

D・F氏は同世代の地区外出身の住民との交流も積極的に行うようになった。またA・C・D・F氏は自治区の活動に、D氏は青年団や学区協議会など様々な組織の活動に参加するようになった。また、子供がいるA・C・F氏は地域住民からの積極的なサポートを受けるようになった。一方、H氏は後述の仕事との関係により、朽木地区での交友関係は他の定住者に比べ少ない。

4.3 定住後の職業と収入

A・C・D・F氏は森林組合など事業期間中の活動先へ就職している。就職の際には、事業期間中の活動先などでの知り合いから仕事の紹介などのサポートを受けていた。

しかし、A・C・D氏については、嘱託職員もしくは作業員といった職業であり、収入面での不安が大きい。さらに子供の将来を考えると今後の転出を示唆する意見もある。

また、上記の問題を回避するために、H氏は東京の仕事仲間から仕事を紹介してもらい生計を立てていた。しかし、その仕事には限りがあったため、安定的に仕事を得るために東京との二重生活を余儀なくされていた。

5. まとめ

朽木地区においては、2006年以降の定住者はほとんどみられない。この要因としては、事業期間中の活動先が多様化し、活動先での密な交友関係の形成が難しく、就職へのサポートを得にくい状況であることが考えられる。この改善策として、様々な組織で活動を行うつつも、協力隊員の関心の高い組織での活動時間を長く設けるなどの工夫が必要である。

また定住者の全員が収入面での不安を抱えており、この解決に向けては定住者自身で新しい仕事を生み出していく必要があるが、“緑”の1年間では困難である。事業期間終了後に定住を希望する協力隊員に対しては、仕事を立ち上げる準備期間を支援する仕組みが必要である。

注釈

注1) 本研究では、「定住」を事業期間終了後に受入地域に移住することとする。

参考文献

1) 『農山村再生・若者白書 2010』編集委員会 (2010) : 緑のふると協力隊 どもない学校 農山村再生・若者白書 2010

表1 定住者のライフストーリーの整理

氏名	A	C	D	F	H
性別	男	男	女	女	男
“緑”参加年	2000年	2002年	2003年	2005年	2008年
参加当時年齢	29歳	26歳	25歳	23歳	34歳
参加前	社会人	専門学校卒業直後	大学卒業後	大学卒業直後	社会人
“緑”参加理由	東京から出たかった。山で働きたかった。	森林組合とか自然の中で働きたかった。	森の仕事がしたいと思って。田舎が好き。	なんとなく田舎での暮らしに興味があった。	田舎で自分のテーマを見つけたい。
協力隊での活動場所	森林組合。	森林組合、生き物ふれあいの里、観光協会、キャンプ場。	観光協会、生き物ふれあいの里、山菜農園、グリーンパーク。	観光協会、朽木の森、教育委員会、生き物ふれあいの里。	観光協会、山人協会。
協力隊期間中の交流	毎日のように役場の人と飲みに行った。近所の人から野菜とかを買った。	大家さん・担当者からご飯などおすそ分けを頂いた。飲み会・集会の残りものを貰った。	観光協会に、役場の人が集まって来て、お話しした。役場の職員さんと仕事終わりによく飲みに行った。	近所の人からおすそ分けや、お風呂を頂いた。買い出しなどで近所の人に車に乗せてもらった。	針畑の移住者のコミュニティでの知り合いから田んぼを借りた。
定住年度	2001年	2007年	2004年	2006年	2009年
協力隊終了から定住まで	協力隊終了直後に朽木へ移住。	実家でアルバイト(1年)→知床でアルバイト(半年)→京都府美山町で森林組合(2年半)。のち朽木へ移住。	協力隊終了直後に朽木へ移住。	協力隊終了直後に朽木へ移住。	協力隊終了直後に朽木へ移住。
定住理由	派遣されたところに住むつもりで来ていた。	協力隊で派遣されたところで、森林組合の仕事が貰えたから。	関係に距離は大きい。広がっていた関係を止めたくなかった。	人が良かった。ここが一番安心できた。	移住者のコミュニティに惹かれた。東京から仕事を貰い朽木で生活するチャレンジ。
定住後の職業変遷	グリーンパークの臨時職員(4年)→グリーンパークの正規職員(1年)→森林組合の作業員(7年)	森林組合の作業員(6年)	売店でアルバイト(半年)→天空でパーク(1年半)→県議会選挙事務所のアルバイト→北川ダム建設事務所の臨時職員(1年)→やまご事業の指導員(7年)	生き物ふれあいの里の臨時職員(2年)→役場の青少年課の嘱託職員(1年)→出産前に退職、専業主婦	映像関係の仕事(元同僚からの斡旋)
定住後の収入	最低限かもしれないが、文化的な生活はできている。林業は時給なので厳しい。	林業は時給なので厳しい。家庭を持つといろいろお金がかかる。なんとかやっていると感じ。	嘱託指導員なので給料が上がらない。一人で生活していても、いつかつらくなるかも。	最低限であるが、出来る範囲で生活している。地域貢献の仕事ならば、少なくとも仕方がない。	東京から離れていると貰える仕事に限られる。食べていくので精一杯。
定住後の交友関係	グループには参加していないが、いろいろなところに顔を出して情報を得るようにはしている。	いろいろなところに顔を出して情報を得るようになっている。子供が生まれてから親同士の知り合いが増えた。	同世代では青年団・市の青年協議会での関係が多い。地域外出身の同年代女性と愚痴や相談などを行っている。	近所の人の子供を気にかけてくれ、買わなくていい位おさがりをくれる。近所の人と子育て相談したりと井戸端話をしている。	針畑の知人から田んぼを借りて、米作りした。山仕事に誘われたが、裏切ってしまうそうだった。
定住後の参加組織	自治区:人が少なく、普請はほとんどない。気がついたところは修繕などを行っている。	自治区:普請には出ている。役はまだ回って来ない。(消防団:誘われているが、まだ参加してはいない)	青年団、市の青年協議会、朽木たいこ:若い人が多い。学校の評議員、学区区会議、群・人・ネットワーク自治区:普請には出ている。	青年団、絵本の読み聞かせサークル:子供が出来てからは行っていない。(婦人会:声はかけられているが参加していない)	仕事の関係で去年は東京にいたことが多かった。自治区、針畑の移住者コミュニティ。
現在の家族構成	夫婦、子供3人	夫婦、子供1人	独身	夫婦、子供2人	独身